

第六章 日本最後ノ決心

列國ニ日露交渉經過ノ内告

日露交渉ノ内容ハ日英同盟協約ノ精神ニ基イテ、最初カラ英國ニ内示サレテ居ル。茲ニ日英協約ノ精神ニ基イテト云フタノハ曩ニ記シタ如ク該協約ニハ其規定サレテ居ル利益ヲ害スル様ナ別約ハ他方締約國ト協議セスニハ結ハヌト定メテ在ルカ、今日本カ露國ト交渉シテ居ル事柄ハ斯クノ如キ利益ヲ害スル底ノモノテ無イカラ、協約ノ正文上當然之レヲ英國ト協議スル必要ハ無イノテアル。然シ此様ナ重要案件ノ話合ヲ露國ト爲ス日本カ、其同盟國タル英國ト没交渉テ居ルノハ、協約ノ精神ニ副ハヌコト勿論故、之レカ内示ヲシタノニ外ナラヌ。

今ヤ日露ノ交渉ハ半歳ヲ費シタカ未タ少シモ妥協ニ達シ得ル光明カ見エヌノテ、我主張ノ趣意ヲ外國殊ニ米國ニ公然通告シテ誤解ノ發生ヲ防キ、意思ノ疏通ヲ計ル必要ヲ感シ、小村外相ハ談判經過ノ内告ヲスル様在外使臣ニ訓電シタ。然ルニ日露交渉ノ經過思ハシカラス、空氣益々險惡ニ赴キ、第三國カラ調停ヲ申込ム氣分モ見受ラレ又右ノ内告ノタメ我國カ調停ヲ希望シテ居ル様ニ誤解サレル虞モアルカラ、我當局ハ事前ニ之レヲ阻止スル爲、必要ノ訓電ヲ發シタ。

我要求ニ對スル露國ノ回答

調停問題ニ付テハ後ニ一括記載スルコトトシ、再ヒ日露交渉其後ノ成行ヲ述フレハ、明治三十七年一月六日ニ「ローゼン」公使カラ回答カ來タ。其要領ハ第二條ニ對スル我修正ニハ同意スルカ、第五條ト第六條トニ付テハ露國ノ原案維持ヲ主張シ、日本カ此主張ヲ容ルレハ「滿洲及其沿岸ハ日本ノ利益範圍外ナルコトヲ日本ニ於テ承認スルコト、同時ニ露國ハ滿洲ノ區域内ニ於テ日本又ハ他國カ其清國トノ現行條約ノ下ニ獲得シタル權利及特權(但シ居留地設定ヲ除ク)ヲ享有スルコトヲ阻礙セサルヘキコト」ト云フ條項ノ挿入ヲ承諾スト云フニ在ル。然シ我國トシテ第五條ト第六條トヲ其儘受入レルコトノ出來ナイノハ勿論、滿洲保全ノ約束ナキ協約ニ同意シ能ハヌノハ自明ノ理タカラ、左記ノ方針ヲ決定シテ重ネテ露國ノ再考ヲ促スコトトシタ。

一、韓國ニ關シテハ毫モ退讓ノ餘地ナキカ故ニ我修正ヲ維持シ、露國ノ主張ニ係ル第五條前半及第六條全文ヲ削除スルコト。

二、滿洲ニ關シテハ左ノ修正ヲ以テ露國ノ提議ヲ容ルルコト。

滿洲及其沿岸ハ日本ノ利益範圍外ナルコトヲ日本ニ於テ承認スルコト、但シ露國ハ滿洲ノ領土保全ヲ尊重スルヲ約スルコト。

露國ハ滿洲ノ區域内ニ於テ日本又ハ他國カ清國ト現行條約ノ下ニ獲得シタル權利及特權ヲ享有スルコトヲ阻礙セサルヘキコト。

韓國及其沿岸ハ露國ノ利益ノ範圍外ナルコトヲ露國ニ於テ承認スルコト。

三、露國對案ニ左ノ一條ヲ加フルコト。

日本ハ滿洲ニ於ケル露國ノ特殊利益ヲ承認シ、並ニ之等ノ利益ヲ保護スル爲ニ必要ナル措置ヲ取ルハ露國ノ權利ナルコトヲ承認スルコト。

四、居留地設定ニ關スル制限ハ日清通商航海追加條約ト抵觸スルカ故ニ之レヲ削除スルモ、本件ニ關シテハ他國モ既ニ同様ノ權利ヲ有シ居ルカ故ニ、日本ハ他國ト均一ノ取扱ヲ受クレハ満足スルコト。

日本 最後ノ決心

以上ノ我對案ハ平和ニ時局ヲ解決スル爲出來ル丈ケ露國ノ主張ヲ取入レタモノテ、最早此上ノ讓歩ハ我トシテ爲シ得サル所故、此對案ヲ露國カ容ルルヤ否ヤハ即チ和戰ノ分レ目テ我國安危ノ懸ル所ヲ在ル、從ツテ我國トシテハ最モ慎重ナル廟議ヲ盡ス必要カアルノテ一月十二日御前會議ヲ開キ、病氣ノ桂首相ヲ除キ他閣員全部ノ外ニ伊藤、山縣、大山、松方、井上ノ諸元老及陸海軍參謀幹部モ參列シテ、前記ノ我對案ヲ討議可決シ、若シ露國カ満足ノ回答ヲ之レニ與ヘヌカ、又ハ其回答ヲ不合理ニ遲延スルニ於テハ、我國ハ脅威サレツツアル地位ヨリ脱出シ、其權利ト利益ヲ保護スル爲、必要ト認ムル手段ニ出スルノ已ヲ得サルコトヲモ、同時ニ滿場一致ニテ決議シ、右對案ノ趣旨ヲ口上書トシテ露國政府ニ提出スル様翌十三日栗野公使ニ電訓シ、此口上書ニハ我修正理由ハ從來既ニ餘蘊ナク説明シ盡シテ有カラ、露國ノ再考ヲ切望スル外重ネテ陳辯

ノ必要ヲ見ヌト述ヘ、又此上時局ヲ遷延セシムルハ我國ノ爲甚タ危險故速カニ露國ノ回答ヲ望ムト記シテアルハ、ソシテ栗野公使ニ對シテハ口上書提出ニ當リ何等ノ意見ヤ説明ヲ加フル可ラス、若シ先方ニテ何か開タ場合ニモ訓令ヲ求メスシテ之レニ返答スヘカラストノ注意ヲ與ヘ我最後ノ決心ヲ示シテ居ルカ、栗野公使カ露國駐劄ヲ承諾シタ事情其他同公使ト伊藤侯トノ是迄ノ持論聯繫等ニ鑑ミ、更ニ我國情ヲ闡明シ出先テ齟齬ヲ生セシメヌ爲、御前會議ノ詳細ヲ同公使ニ通報スルト共ニ、元老全體ノ一致贊同ヲ得居ル次第ヲモ云ヒ送ツタ。露國ノ回答ハ然シ容易ニ來ナイノテ、一月二十六日栗野公使ニ再ヒ電訓シテ速答ヲ求メサセタカ、露國ハ言ヲ左右ニ託シテ一向ニ埒カアカヌ故、小村外務大臣ハ一月三十日栗野公使ニ電報シテ左ノ申入ヲ「ラムスドルフ」伯ニ爲ス様命令シタ。

現下ノ時局ヲ此上遷延セシムルハ日露兩國ノ爲ニ重大ナル不利益ナルヘシト確信スルヲ以テ、帝國政府ハ露國外務大臣閣下ノ指定セラレタル日取即チ次週火曜日（二月二日）以前ニ露國政府ノ回答ヲ受領シ得ムコトヲ希望スト雖モ、此事タル到底不可能ナルカ如ク見ユルヲ以テ、帝國政府ハ果シテ「ラムスドルフ」伯カ指定セル時日即次週火曜日ヲ以テ回答ニ接スルヲ得ヘキヤ、若シ否ラストセハ露國政府ハ果シテ何日ヲ以テ右回答ヲ與フヘキカ、其確タル日取ヲ承知セムコトヲ希望ス。

此電訓ハ一月三十一日ノ夕方栗野公使カラ「ラムスドルフ」伯ニ通達サレタカ、其時同伯ハ自分ハ現下ノ時局カ重大ナコトヲ充分ニ領得シ、又成ルヘク速ク回答ヲ發スル様希望シテ居ルケレト、問題頗ル重大ナル爲輕々シク處理スルコトカ出來ス、同時ニ關係各大臣及「アレキシエフ」總督ノ意見ヲ調和セシムル必要モ

アルノテ、自然回答カ遅延シテ居ルカ、回答發送ノ日取ハ皇帝ノ聖斷ニ依ル事故、今之レヲ正確ニ告ケルコトハ困難ナルモ、本件ヲ進捗セシムル爲ニ盡力ヲ怠ラサルヘシト述ヘ、一向ニ要領ヲ得ヌノニ引換ヘ、遼陽ニ於ケル露軍ノ行動ハ頗ル活氣ヲ呈シ、鴨綠江方面ヘ軍隊輸送開始ノ情報ハ連リニ來ル。

最 後 通 牒

夫レテモ未タ我當局ハ我慢シテ居タカ、二月三日遂ニ勘忍袋ノ緒ヲ切ツテ、最早露國ニ回答ノ速行ヲ迫ルニ及ハヌト栗野公使ニ電報シ、其翌々日即チ二月五日ノ午後五時更ニ同公使ニ電報シテ、左ノ公文ニ一通ヲ「ラムスドルフ」伯ニ提出スル様訓令スルト同時ニ、時局ヲ此上遷延セシムルコトハ出來ヌカラ、我政府ハ懸案ノ對談ヲ打切り、露國ノ爲ニ侵迫サレタ我地位ヲ防衛シ、我權益ヲ保護スルニ必要ト認ムル獨立行動ヲ採ルニ決定シタニ就テハ、右ノ公文提出ノ上ハ館員一同ヲ率ヒ速カニ露都ヲ引上ケ伯林ヲ命ヲ俟ツヘク、此公文ハ露國ノ回答カ既ニ發送済タルト否トニ拘ラス、又其回答ノ内容如何ニ拘ラス直チニ之レヲ提出スヘシト嚴命シタカ、我軍部テハ此電報カ出ルト間モナク、愈々六日カラ近衛、第二、第十二ノ三個師團ノ動員ヲ開始シ、軍事行動ニ移ル決心ヲシタノテアル。

公 文 ノ 一

日本國皇帝陛下ノ特命全權公使ナル下名ハ、本國政府ノ訓令ニ遵ヒ、露國皇帝陛下ノ外務大臣閣下ニ對シ、左ノ通牒ヲ爲スノ光榮ヲ有ス、日本國皇帝陛下ノ政府ハ、韓國ノ獨立及領土保全ヲ以テ、自國ノ康寧ト安

危トノ爲ニ緊要缺ク可ラサルモノナリト思惟ス、故ニ如何ナル行爲タルヲ問ハス苟モ韓國ノ地位ヲ不安ナラシムルモノハ帝國政府ニ於テ之レヲ看過スル能ハス。

露國政府カ韓國ニ關スル日本ノ提案、即チ帝國政府ニ於テハ之レカ採用ヲ以テ韓國ノ存立ヲ確實ニシ、並ニ該半島ニ於ケル帝國ノ優越ナル利益ヲ擁護スル爲メ緊要不可缺ト思惟スル提案ニ對シ、到底妥協ノ望ナキ修正案ヲ提出シテ執拗ニ之レヲ拒絕シタルコト、並ニ又露國カ其清國トノ條約及滿洲地方ニ利益ヲ有スル他ノ諸國ニ對シ累次與ヘタル保障ノ存在スルニ拘ラス依然該地方ノ占領ヲ繼續シ、爲ニ甚シク侵迫ヲ蒙レル滿洲領土保全ノ尊重ヲ約スルコトヲ執拗ニ拒否シタルコトハ、帝國政府ヲシテ自衛ノ爲其採ルヘキ手段ヲ慎重ニ考慮スルノ已ムヲ得サルニ至ラシメタリ。

露國ニ於テ了解シ得ヘキ理由ナクシテ屢次回答ヲ遷延シ、加フルニ平和ノ目的トハ調和シ難キ軍事活動ヲ爲セルニ拘ラス、帝國政府カ現交渉中用ヒタル耐忍ノ程度ハ、其露國政府トノ關係ヨリ將來誤解ノ一切ヲ除去センコトヲ忠實ニ希望シタルコトヲ十分證シ得テ餘リアリト信ス、而モ帝國政府ハ其盡力ノ結果帝國ノ穩當且無私ナル提案若ハ又絶東ニ於テ鞏固且恒久ノ平和ヲ確立スルニ近キ如何ナル他ノ提案ニ對シテモ露國政府ノ同意ヲ得ルコトハ毫モ其望ナキヲ領得シタルカ故ニ、現下ノ徒勞ニ屬スル談判ハ之レヲ斷絶スルノ外他ニ選フヘキ途ヲ有セス。

帝國政府ハ右ノ一途ヲ採用スルト同時ニ、自ラ其侵迫ヲ受ケタル地位ヲ鞏固ニシ、且之レヲ防衛スル爲、並ニ帝國ノ既得權及正當利益ヲ擁護スル爲最良ト思惟スル獨立ノ行動ヲ採ルコトノ權利ヲ保留ス。

公文ノ二

日本國皇帝陛下ノ特命全權公使ナル下名ハ本國政府ノ訓令ヲ遵守シ全露西亞皇帝陛下ノ外務大臣閣下ニ對シ茲ニ左ノ通告ヲ爲スノ光榮ヲ有ス。

日本帝國政府ハ露西亞帝國政府トノ關係上將來ノ紛糾ヲ來スヘキ各種ノ原因ヲ除去センカ爲、有ラユル和協ノ手段ヲ盡シタルモ其効ナク、帝國政府カ極東ニ於ケル鞏固且恒久ノ平和ノ爲ニ爲シタル正當ノ提言、並ニ穩當且無私ナル提案モ之レニ對シテ當サニ受クヘキノ考量ヲ受ケス、從ツテ露國政府トノ外交關係ハ今ヤ其價值ヲ有セサルニ至リタルヲ以テ、日本帝國政府ハ其外交關係ヲ斷ツコトニ決定シタリ。

下名ハ更ニ本國政府ノ命ニ依リ、來ル、日ヲ以テ帝國公使館員ヲ率ヒテ露京ヲ引揚クル意思ナルコトヲ茲ニ併セテ「ラムスドルフ」伯閣下ニ通告スルノ光榮ヲ有ス。

此二公文ハ二月六日ノ午後四時ニ栗野公使カラ「ラムスドルフ」伯ニ提出セラレタカ、同公使ハ之レニ先チ「ラムスドルフ」伯カラノ來意カ在ツタノテ、四日ノ午後八時伯ヲ訪問シタラ、露國回答ノ要旨ハ只今「アレキシエフ」總督ニ打電シテ置タカラ、間モ無ク「ローゼン」公使カラ日本政府ニ通達サレルコトト思ハレルト述ヘタ後、其私見トシテ語ツタ所ニ依ルト、矢張り露國提出ノ第五條前半ト第六條ノ維持ヲ固執シ、滿洲ニ關シテハ依然領土保全ノ約束ヲ拒ムモノノ様タカラ、回答モ矢張り之レト同趣旨ヲ想像セラレ、從ツテ便々ト此様ナモノヲ待ツテ居ナカツタ我政府ノ果斷ハ頗ル時宜ニ適シタ措置ヲアツタト考ヘル、聞ケハ明治三十七年ノ新年拜賀式ノ際露帝ハ栗野公使ニ對シ、露西亞ハ大國テ在ル、其忍耐ニハ限りカ在ル、ト云ハレタソウタカ、此様ナ考テハ談合ノ纏マル見込ハ到底無イノテ、平和ノ爲ニ最後迄出來得ル限りノ努力ヲ續ケタ我政府ト栗野公使ノ苦衷カ水泡ニ歸シタノモ亦已ヲ得ヌ次第ナル。

我國ノ調停拒絕

我政府カ日露間ノ交渉行腦ミニ際シ、外國カラ調停ノ來ルノヲ事前ニ阻止スル爲、在外使臣ニ訓令ヲ發シタ事ハ既ニ一言シタ。日本カ何故調停拒絕ノ態度ヲ執ツタカト云フニ、其理由ハ露國カ若シ調停ヲ甘諾スル場合、其意思ハ協定ノ成立ヲ衷心歡迎シテ居ル爲メト見ルヨリモ、之レニ依ツテ時ヲ延ハシ極東ニ於ケル軍備ヲ充實シ其地歩ヲ鞏固ニセントスルニ在リト考察スルノカ、露國從來ノ態度ニ照シテ至當テアルト同時ニ、我國是迄ノ提議主張ハ極メテ穩當且妥協的ノモノテ、若シ之レカ露國ト相對ツクノ直接交渉ヲ纏マリ得ヌ位ナラ、調停受諾ノ要件トシテ今迄要求シテ居タモノヨリモ更ニ多クノ保障ヲ得ナケレハ將來ニ安心カ出來ヌ、然シ之レテハ調停成功ノ見込ハ毫無ク、徒ラニ露國ニ其勢力ヲ滿洲ニ増加スル時間ヲ與ヘルニ過キヌカラ寧ロ最初ヨリ此種ノ運動ヲ起サセヌ様仕向ケルノカ萬全ノ策ヲ云フニ歸着スルコトト考ヘル。米國政府ハ我國ノ意嚮ニ共鳴シ萬一他國カラ此種ノ申出カ在ツテモ、米國ハ決シテ之レト行動ヲ共ニシナイト確言シ、獨國政府モ亦決シテ此種ノ容喙ヲ試ミス又他國ノ企テニモ參加セヌト聲明シタ。英國カ我希望ニ反シテ行動スル様ナコトノ無イノハ同盟國タル關係上云フ迄モ無イカ、一月十三日在露英國大使カ「ラムスドルフ」伯ノ請ニ依リ會見シタ時同伯カラ英國ニ調停ノ勞ヲ執ランコトヲ申入レタトノ語ヲ耳ニシタノテ、林

公使ハ英外相ニ再ヒ我國カ調停ヲ希望セヌ次第ヲ縷述シタ。在本邦英國公使ハ前記ノ次第ヲ通告スル爲一月十八日小村外務大臣ヲ訪問シタカ、此際同公使ハ重ネテ我意嚮ヲ聞イタカラ小村外相ハ是迄述ヘタ理由ノ外ニ、今幸ニ露國テ穩健派カ勝ヲ占メ進ンテ調停ヲ希望シテ居ルト假定シ、日本カ之レヲ受諾スルトシテモ、交渉ノ進行中若シ武斷派カ再ヒ擡頭シテ來タラ、此試ミハ丸潰レトナルモノト豫メ覺悟セネハナラヌ。然ルニ露國テハ此兩派カ互ニ相爭ツテ居ルノタカラ斯クノ如キ不安心ナ事態ヲ控エテ調停ヲ受諾スルコトハ到底出來ヌト附ケ加ヘタ。

調停問題ニ對スル英米獨ノ態度ハ以上ノ通りテアルカ。佛國ハ露國ノ同盟國テ在リ、同盟ノ主眼ハ露國カ歐洲ニ強力ノ軍備ヲ持ツテ居ル事テ、又露國ニハ非常ニ巨額ノ貸金ヲシテ居ルカラ、露國ニ戰爭ヲサセヌ爲ニ出來ル丈ケノ努力ヲスルノハ至極尤モナコトテ、從ツテ調停ノ成立ニ熱心ナノハ能ク了解カ出來ル。佛國側カラ調停ニ付テ口ヲ切ツタノハ明治三十七年一月十三日テ、外務大臣「デルカツセー」氏ハ本野公使ニ對シ、日露兩國ノ懸案ニ關シ充分研究ヲ遂ケタカ、斯ク爭ツテ居ルノハ兩國ノ不爲テ、自分ハ露帝ト其要路者ノ大多數トカ熱心ニ平和ヲ希望シテ居ル事ヲ確言シ得ル根據ヲ有スルト同時ニ、日露兩國カ今尙ホ爭ヒツツアル論點ハ大戰争ノ災厄ヲ賭スルカ如キ性質ノモノニ非スト考ヘルカラ、自分個人ノ責任テ現下ノ事態ヲ友好的ニ解決スル爲盡力シテ見ント思フ。此事ハ未タ自分ノ關係ニモ話サス、後列露國大使ニ面會ノ筈タカ大統領ニハ今夜會フコトトナツテ居ルカラ、大統領ノ承認ヲ得タラ更ニ立チ入ツテ御話シタイト申出タ。帝國政府ハ此考案カ遂ニハ不成功ニ終リ、之レニ依ツテ利益スルモノハ獨リ露國丈ケテ在ルコトヲ強調シテ、堅

ク其仲介ヲ謝絶シタラ、「デルカツセー」外相ハ自分ハ決シテ調停トカ又ハ仲介等ヲスル意思ハ無イノテ或種ノ讓歩ヲスル様露國政府ニ勸告スルノカ平和ノ最高使命ヲ充タス爲ノ自己ノ義務ヲ在ルト感シタ迄テ、其上談判カ如何ニ成行クトモ自分ノ知り得ル限りテハ無イ、以上ハ日本ニ毫モ關係セヌ事テ在ルカ、日本政府ハ第五條ノ前段ニ飽迄反對ナノカト質疑シタ。我政府ハ露國カ其租借地ヲ除ク滿洲一圓ヲ軍略的ニ使用セヌトノ保障ヲ與ヘヌ限り、日本トシテ第五條ノ前段ニハ到底同意シ難イト答ヘ、是テ佛國ノ調停談ハ打切ラレタ。

日本ノ滿洲保全聲明

恐ラク佛國カラノ勸誘ヲ受ケタ爲テモアラウカ、今度ハ支那カラ英國ヤ米國ノ公使ニ時局ノ平和的解決ノ爲盡力シテ呉レル様連リニ頼ミ込シタ、然シ兩公使共之レヲ謝絶シタノテ此運動ハ立消ヘタ、支那ノ身ニ成ツテ見レハ、若シ戰爭ニ露國カ勝テハ其要求ハ益々加重スルタロウシ、反對ニ日本カ勝ツタトシテモ滿洲ハ矢張り取ラレルタロウカラ、日露ノ戰爭ハ結局支那ノ不爲タト考ヘタノハ必スシモ無理テ無イ様ニ思ハレタカラ、支那ニ安心サセテ味方トスルノ急務ヲ感シタ我政府ハ、在北京内田公使ヲシテ一月三十日滿洲保全ノ聲明ヲ慶郡王ニサセ、同公使ハ其要求ニ應シ更ニ書面テ翌三十一日之レヲ陶太均ニ渡シタ。